
TALES OF SCHOOL LIFE

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T A L E S O F S C H O O L L I F E

【Nコード】

N 3 4 1 7 B A

【作者名】

唐笠

【あらすじ】

これはテイルズオブエクシリアの主人公、ジュードを中心とした学園生活を描いた物語である。

個性的な仲間たちとともに繰り広げる笑いあり（痛みの）涙ありのドタバタ学園パロディ。

果たして彼はその先になにを見出だし、なにを得るのか！？
そして、この物語に意味はあるのか！？

※作品内のCPは作者の偏見により構成されております。

また主にエクシリア・ヴェスペリア・シンフォニア（ラタを含む）・

アビスからの登場が多くなると思います。

第1話 僕と学園と出会いの春（前書き）

ティルズの二次創作です！

実をいうと、ティルズの二次創作は初じゃなかったり…

タイトルがどこぞのバカたちが織り成す話に似ているのは仕様です
（笑）

第1話 僕と学園と出会いの春

ここは私立シッポ学園。

別にTAIL（尻尾）であってTAL E（話）ではないのでご了承ください。

まあ、何はともあれここは東西南北から色々と癖が強い人たちが集まる高校だ。

ある意味特色ある学校と言えるだろう。

そして、今年もそんな珍妙な学校の門を叩く生徒たちがやって来る。

「はあはあ……」

まずい！

このままじゃ入学式早々に遅刻だよ！

そんなことを考えながら、パンをくわえ全力疾走しているのはジュード・マティス。この話の主人公である。

そこ、パンをくわえながら走るのはヒロインの役目とか言わないように。

彼はそれを散々ネタにされたのだからそろそろやめてあげてほしいものだ……

「うわぁ!？」

「おっと！」

しかし、お決まりのように曲がり角での衝突は避けられなかったようである……

しかも相手は受け身をとったのにジュードの方はしりもちをついただけだ。

大丈夫か、主人公……

「いたたた……」

「大丈夫か？」

この一見すると男のような台詞を言ってジュードに手を差しのべたのがミラ・マクスウェル。主人公っぽい言動が多いが立派なヒロインである。

「あっ、だいじょ……」

そう言ってジュードも差し出された手を掴もうと顔を上げるが、角度的にミラの短いスカート（パレオに見えなくもない……）の中が今にも見えそうなため言葉に詰まってしまう。思春期の彼にはこの上ないほどのダイレクトアタックだろう……

「どうしたのだ？」

まさかさっきので立てなくなってしまったのか？」

（今の状況にたちそうです…）

黙れムツツリ。

そういった話題はどこぞのFクラスメンバーと話してこい。

「すまない、私も今は急いでいるためもたまたしてはいられないのだ」

「あつ、こちらこそすみません…」

「うむ。見たところ目立った外傷も無さそうだし大丈夫そうだな」

それだけを確認するとミラはそそくさと走り去ってしまった。

（きれいな人だったなあ…）

当の思春期真っ盛り君は遅刻目前だというのに彼女の走り去る姿をボーッと眺めていたのだった…

ジュードSIDE

「以上で入学式を終了する。各々、割り振られたクラスへ向かうように」

マイクを持ったクラトス教頭の言葉で入学式が締め括られる。

それにしても、入学式の日には寝坊はついてなかったなあ：

一応、間一髪のところ入学式には間に合ったけど、先生たちに目をつけられていないことを願おう。

そんなことを考えながら僕は自身の所属クラスである1－Aに向かっていた。

「あ、あの……」

そんな最中、僕にかけられたたどたどしい声。

その声に振り向けば奇妙な人形を抱えた少女がいた。

見た目的に高校生じゃないから、小学生が迷い込んでしまったのだろうか？

「どうしたの？もしかして迷子かな？」

「あっ、いえ…」

そうじゃなくて…1－Aの教室を探していて…」

1－Aと言えば、僕の向かう先と同じだが小学生にしか見えない彼女がそこに向かう訳がないだろう。

「ここは小学校じゃなくて高校だよ？」

「いえ…私はその…飛び級生で…」

「えっ…」

こちらの顔色を伺いながらも言った彼女の言葉が僕には信じられなかった。

飛び級生と言えば、俗に言う天才のみに与えられる称号であり、自身の学力に見合った学年にまで進級できるといったものだ。

それは同時に彼女の目的地が僕と同じということを意味するわけで

……

「なんだあ！

その不服そうな顔は！文句でもあるのか！」

思考の海をさ迷っていた僕に向かって彼女の抱えた人形がつつかかってくる。

……………

……………

……………

……………

「えええ！？

人形がしゃべったああ！？」

「人形じゃなくてティポって言うんだぞ！」

僕の驚く声にびくついた少女とは裏腹に人形の方はなおも僕に挑戦的な眼差しを向けていた。理由はどうあれ、自我を持っていることだけは確かのようにだ。

「ティポは…私の…友達なんです」

「そうだよ」

僕はエリーの友達なんだよ」

「エリー？」

さっきまでとは打って変わって間延びした声のティポに僕は首を傾げながらたずねる。

「その…エリーっていうのは私のことで……
本名は……エリーゼ・ルタスと言います」

「そ、そうなんだ…よろしくねエリーゼ。僕はジュードだよ」

「はっ、はい…よろしくおねがいます…ジュード」

一応、同じクラスになるのだろうからおかしくはない会話なのだが、どうもエリーゼのびくつき具合が気になってしまう。

「とにかく教室に向かうか」

「は、はい」

「優しい人がいっぱいいるといいねえ」

「そこらへんは大丈夫だと思うよ。たぶん…」

まあ、さすがにクラス中が不良ということもないだろうから大丈夫だろう…

そう思い、いつの間にか辿り着いていた1-Aの扉を開ける。

「「双牙斬!!」」

ガギィーーン!!

どうやら僕は教室を間違えたようだ。

認めないぞ…

僕は同じ顔をしてるやつが教室で争ってるのなんて決して認めないんだからな！

「ジュード…入らないんですか…？」

「とっととしろお！」

僕の後ろにいるためエリーゼとティポは教室内の様子を理解していないようだ。

それを幸ととるべきか不幸ととるべきか……

「エリーゼ、ちょっと待っててね」

「どこか行っちゃうんですか…」

「違うよ。

ちよっと教室の中に危険なところがないか確認してくるだけだからさ」

そう言ってエリーゼの頭にそっと手をのせると、僕は教室に入ってしまった。

「くらいやがれ崩襲脚！」

「甘いんだよクズが！紅蓮襲撃！！」

赤髪二人が懲りずにケンカを続けていた。

さすがにあのケンカにわってはいえる勇気はないので、周りを取り囲

んでいる比較的話しやすそうな人物に声をかけてみる。

「あの、これっていったいなにがどうなっているんですか？」

「ん？」

あんたもAクラスか？」

「あつ、はい。Aクラスのジュード・マティスです」

なぜだか僕の質問が流された気がしないでもないが、自己紹介は必用だろうと思いついておく。

「よろしくなジュード。

俺はロイド・アーヴィング。んで、こっちにいるのがコレットとジーニアスだ」

ロイドの名乗った青年が人の良さそうな笑みを浮かべ、自身の後ろにいる二人の紹介をする。

「よろしくねジュード」

「こちらこそよろしくねジーニアス」

たったこれだけの会話だけどわかったことが一つある。

それは話しかける人を間違えたということだ。

たしかにロイドは悪いやつじゃないだろうけど、状況を分析するにはむいていない。その点、ジーニアスはそうだったことが得意そうである。

「ジュードはワンちゃん好き？」

「わ、ワンちゃん…?」

「犬のことだよ?」

コレットが不思議そうに聞いてくるが、ワンちゃんが犬を示してくることがくらはわかる。問題なのは、なぜこのタイミングで聞かれたのかということである。

「まっ、まあ…好きだよ」

「やったあ♪」

じゃあ、今度一緒にワンちゃんの餌やりしようね」

「う、うん…」

喜ぶコレットにおされながら生返事をする。

「コレット、餌やりもほどほどにしなよ…」

「大丈夫だよ♪」

「本当に大丈夫かな…」

この前なんて隣町まで行って野良犬に餌やりしてたじゃないか…」

あれ…?

もしかしてさっきのって気軽に引き受けちゃまずかったのかな…

「まあまあ、そんなに言わなくなたっていいじゃないかジーニアス。今度は俺も着いてくからさ」

「前回だってそう言って、結局は寝坊して来なかったじゃないか…」

「あれ？」

そうだったか？

わりい、わりい、俺も悪気があってやったわけじゃないんだ」

「本当に今度はちゃんと頼むよロイド…」

呆れるように言うジーニアスに明るい笑みを浮かべるロイド、そしてすでに状況が呑み込めないのか、はたまたそれでいてにこやかな笑みを浮かべているのかわからないコレット。

「なんだか三人とも仲良いみたいだけど同じ中学校だったりするの？」

「ああ、俺たちは小学校からずっと一緒なんだ」

「家も近所なんだよ♪」

「と言っても、ここは全寮制だから関係ないんだけどね」

ジーニアスの言う通り、ここ私立シッポ学園は全寮制なのだ。

たしか僕は151室だったよね。

.....

.....

.....あれ？なんか

忘れてない？

「通牙連刃斬！！」

「空破絶風撃!!」

そうだった…

元々、同じ顔した人たちの奇妙なケンカの詳細を聞きに来たんだっ
た……

「ねえ…あの二人はいつたいなんなの？」

「ああ、あの二人はルークとアッシュと言って双子みたいだぞ」

「よく知らないけど、どこかの貴族らしいよ」

「そう…なんだ…」

言われてみればたしかに貴族の風格らしきものが漂ってなくもない。
ケンカしてて台無しだけど……

「それにしてもなんでケンカなんてしてるんだろう？」

「ケンカするほど仲がいいって言うから仲良しさんなんだよ♪」

もうコレットにはどこからつつこんだらいいかわからない…

「本人たちの好きにさせとけばいいよ。」

貴族だかなんだか知らないけど、僕は争い事は好まないからね」

「あははは…

僕もちよっとそういうのは勘弁してほしいかな」

なんだかジーニアスとは気が合いそうだなあ…

「だけど男同士の拳での語り合いも必用だぜ？」

だからと言ってあれはやりすぎなんじゃ…

「さすがに止めた方がいいよね…？」

「大丈夫だよ。勝手に止まるからさ」

「そういうもののなの…？」

「まあまあ、見てなっつて」

ジーニアスの言うことが疑問ではあるが、一応二人を見守ることにする。

「飛燕瞬連斬！！」

「斬魔飛燕斬！！」

いつの間にか空中戦に発展してる…

このままじゃ設備に被害が出かねないよ！？

「ノクターナルライト！」

「うわあ！？」

あっ、ヘソ出しが投げナイフで撃ち落とされた…

「ピアススライン！」

「ぐはぁ！？」

オールバックの方も矢で撃ち落とされてるよ…

「ルーク！」

あなたはもう少し静かにできないの！」

「アッシュもですわ！」

少しは周りの方の迷惑を考えてください！」

「ごめんティア…」

「すまないナタリア…」

さっきまで騒がしかった二人が途端に大人しくなる。なるほど、尻にひかれるタイプか…

「お騒がせしてすみません」

「これからはこういう事がないよう、二人にはよく聞かせておきますわ」

そう言ってティアとナタリアが頭を下げる。

ナタリアの方は話口調から察するにルークやアッシュと同じ貴族の出だろうか？

「そんなに固くならなくていいって。」

それよりも同じクラス同士仲良くしてこうぜ」

「みんな仲良しが一番だよ♪」

ロイドにコレットはフレンドリー過ぎやしないだろうか…

「あまり馴れ馴れしくするなよ。

あくまで級友として付き合うだけだ」

アッシュの方は偉そうだな…

それともこういうのをツンデレっていうんだっけ？

「俺様はルーク・フォン・ファブレ様だぞ。

なんでこんな平民なんかと付き合わないといけないんだよ！」

こりゃ、アッシュ以上に酷い…

あのロン毛を切ってやりたい気分だ。

「ルーク、ちょっといいかしら」

「あつ、ちょっ、まてティア！

悪かった！俺が悪かったから許してくれティア！」

まあ、今のさっきなんだから怒られて当然だよね…

そんなことを思っただけで廊下に連れ出そうとするティアに引きずられていくルークを冷めた目で見てみると教室の扉が開く。

「おいおい、朝っぱらからお仕置きタイムか？

そういう殊勝なプレイは夜にしてくれよ」

「どう見たら今の状況がそう見えるんだよ！」

ルークが教室に入ってきたフランクな感じの人物に突っかかる。

「おたく、そういう趣味の持ち主じゃない？」

「あたりまえだー！ー！！」

まあ、ルークの叫びもつともだろう。

「失礼ですが、どちら様ですか？」

「俺？」

俺はこのクラスの担任教師アルヴィンだけど？」

「ええええええええええ！？」

これが初めて僕らのクラスの心が一つになった瞬間だった……

こんなフランクで適当そうな人物が教師のはずかれないという驚きで

•
•
•
•
•
•

「なんだあ！ その驚き方は！」

「まるでこの俺が教師じゃ問題あるみたいじゃないか」

うん、事実おかしいと思うよ……

もつと適任な人ならいくらでもいたと思うし……

「まっ、俺は大人だからそこらは気にしないでいてやるよ。それよりも、こん中でジュードってやついるか？」

「ぼ、僕ですけど…」

恐る恐る手を上げた僕にアルヴィンが近づいてくる。

「ほー、お前がジュードか…
優等生面してんなあ……」

「あの…僕のことなにか知ってるんですか？」

僕の顔を品定めするかのようにあごに手を当てて言うアルヴィンにたずねる。

「知ってるよ。ジュードって名前で俺のクラスの生徒だってことを」

「そう意味じゃなくて誰から僕のことを聞いたか聞いているんだけど…」

「ジュード君が廊下に放置したお姫様からだけど？」

「……………あっ…」

教室のごった返しですっかり忘れてた…

そう思い、急いでエリーゼのいる廊下に向かおうとした時、アルヴィンの後ろからちょこんとエリーゼが顔をだした。

「ジュード…忘れるなんて酷いです…」

「ジュード君の薄情者ー！」

「ごめん…エリーゼ、ティポ…」

なんか今日は失敗続きだな…

こんなんでも本当に大丈夫だろうか…？

「はいはい、ケンカはそこまで。

みんな席につけ。自己紹介を始めるぞ」

アルヴィンの一声でみんながそろそろと席につく。

えーと、僕の席はっと……………あった！

僕の席は窓側の席で春真っ盛りの今は日光が暖かくて気持ち良さそうだ。

それにしても隣は空席だけど、入学早々に欠席なのかな？

「じゃあ、適当にまどが——」

ガラガラ

アルヴィンが言い終わる前に教室の扉が開けられる。

「はあ…はあ…遅れてすまなかった…」

そう言って入ってきた人は僕の予期せぬ人物だったんだ…

第1話 僕と学園と出会いの春（後書き）

教室に入ってきた人物とはいったい！？
えっ？

どこかのバカコメに同じ展開があった？
き、気のせいですよ…

次回もよろしくお願いいたします！

第2話 僕と自己紹介と黒髪の美女（前書き）

颯さん、神代美樹さん感想ありがとうございました！

第2話 僕と自己紹介と黒髪の美女

ジュードSIDE

朝の人だ：

教室に遅れて入ってきた人は朝のパンチラの人だったのだ。
えっ？

失礼な呼び方だって？

だって他になんて呼んだらいいかわからないし：

「なんだ？遅刻か？」

「うむ、遅刻に間違いない」

教壇に立つアルヴィンにパンチラの人は凜とした面持ちで言う。

「名前はミラ・マクスウェルであってるか？」

「間違いない。それが私の名だ」

「じゃあ、ジュードの隣に座ってくれ」

アルヴィンが僕の隣の空席を指さす。

僕もつられて視線をそちらに向ければ、たしかに座席にミラ・マクスウェルと書かれたプレートが置かれていた。
なるほど、パンチラの人はミラっていうのか。

「遅刻記録はとらないのか？」

「今から自己紹介始めんだから遅刻にはならないって」

「しかし、私は入学式に出なかったのだぞ？」

たしかにそれによってミラに目をつけた教師がいるかもしれない。
かく言う僕も遅刻ギリギリだったのは否定できないけど：

「んなもん気にしないって。」

というか、そういう届け出書くのがめんどくさいんだよな」

えっ！？

結局はそこにいきつくの！？

「私一人にそれを許せば、よくない風潮ができかねんのだぞ」

ミラの言う通りなんだけど、なんというかかなり堅いなあ…
胸はあんなに柔らかかそうなのに……

「そんなときゃ、ちゃんと教師としての勤めを果たすさ」

「そうか…」

なら、今回は引き下がるとしよう。すまないな」

「気にすんなって」

アルヴィンとの押し問答を終えたミラはつかつかと僕の隣にまで歩いてくると席についた。

長い髪がふわりとなびいて、そこから微かに甘い匂いが漂う。
いい香りだなあ……

.....
.....
.....

あれ？

なにも話しかけてこない…

さすがに朝会ったばかりだから忘れられてとは思わないんだけど
なあ…

「あの…ミラ？」

なんで僕は疑問形で話しかけているんだろう…

「ん？」

たしか君はジュードだったな。私になにか用か？」

「その…朝会ったよね？」

「うむ、たしかに私と君は朝衝突してしまったな。

あの時は謝罪も早々に済ましてしまっすすまなかった」

「あつ、いや…それはいいんだけどさ…」

まずい…

なんとかして話題が続けないと接点がなくなってしまう。

「他になにかあるのか？」

「……………特にありません…」

「自分から話しかけてきたのに君は変わったやつだなあ…」

そう言ってミラはクスツと笑う。きっと変人だと思われたのだろう。
さよなら僕の青春……

「つうことで氣を取り直して自己紹介を開始するぞ。
窓側の列から順に言っけ」

そんな僕の氣も知らずか、はたまた知ってわざとなのかはわからないが、アルヴィンが軽快な口調で言う。

僕は前から三列目だから今の内になに言うか考えとかなきゃ。
まずは名前を言うとして、次はどこから来たかでいいかな？
他はえっと……………

「次、ジュード」

えっ!?

もう僕の番なの!?

まだなにを言うかほとんど決まってるのに…

ガタッ

席から立てばクラス中の視線が僕に集まる。
こういうのって慣れないから恥ずかしいなあ……

「えっと…ジュード・マティスです。
中学はイルファン中学で、その頃から独り暮らしをしてきました。
後は……………」

なっ、なにを言おう!?

考えろ! 考えるんだ僕!!

.....そうだ!

好きなものを言おう!

それで終われば特に目立つこともなく終わるだろう。

「好みのタイプは『胸が大きくて、髪が長いいい香りがする人』です!」

ふう...なんとか言い切った...

.....

.....

.....

.....

僕はいったいなにを言ってるんだろう.....

「以上、ジュード君の自爆劇でした。みんな惜しみ無い拍手を!」

アルヴィンのはやしたてで沈みかえていたクラスがどよめき始めた。

「自分の好みをバラすとかあいつはバカか?」

クラス入って早々にケンカしてたアッシュにバカ呼ばわりはされたくないよ...

「ははっ、やっぱジュードは面白いやつだな」

ロイド！

やっぱってなに！？

最初から僕のことをそういう風に見てたの!?

「でひゃひゃひゃ、俺様ジュード君とは中々気が合いそうだわ」

全体的にチャライイメーজのある優男が独特のバカ笑いをしている。こんなのと同類なのはまっぴらごめんだ。そしてお前は誰だ!?

「僕はあんなに堂々と言えないよ……」

気の弱そうな金髪アホ毛少年が僕の方を羨望の眼差しで見ってくる。

たぶん、僕がやったのは君が思ってるほど立派なことじゃないよ……

「……よろしくお願いします」

僕はそれだけを言うとうつ向きながら席につく。

「ジュード、大丈夫か？」

「顔が真っ赤だかし、熱でもあるのか？」

「大丈夫……」

大丈夫だから、少しそつとしてくれるかな……」

「うむ、君がそう言うならば仕方がないな」

「ありがとうミラ…」

そう言うとな僕はなるべくミラと目線を合わせないように窓側に視線を向ける。

.....あっ！

僕は自分の目を疑って一度視線をそらし、再度目をこらす。

しかし、それは消えることもなくそこにいた。

窓から程近い木の上で女の子が寝てるのだ。

今はどの学年もなんらかの作業をしているはずなのになにをやっているんだろう？

黒く長い髪に整った顔立ち、そして傍に立て掛けてある細身の剣。まるでどこぞの炎の翼で空を飛ぶヒロインのような特徴である。

「オープンジュード君、外に好みの女の子でも見えたか？」

「なに！？

俺様にも見せろ！どこにいるんだジュード君！？」

「誰もいませんよ！」

たぶん、あのチャラ男とアルヴィンがこのクラスでの僕の天敵になるだろうし、なによりこれ以上僕の評判を落とすたくないと思っ嘘をついておく。

それに一つ言えば、あの娘はあまり僕のこのみじゃない。

どちらかといえばミラみたいなのが好みかな？

「ジュード君」

そんな下手な嘘ついたって俺はだませないよ」

「あ、アルヴィン……」

僕の肩にもたれ掛かるようにアルヴィンが言う。

まずい……

この角度から外を見られれば、間違いなくあの娘がアルヴィンに見

つかってしまおうだろう。

「……………なんだ、本当にいないのか…」

「えっ？」

見ればたしかにあの娘はいなくなっていた。

ほんの数秒前まではたしかにそこにいたのにどこに行ってしまったのだろうか？

「ん？」

その意外そうな反応はなにか隠してるな？」

「な、なんにも隠してませんよ！」

「まっ、今となっちゃ過ぎたことだし詮索しても仕方ないか」

そう言うときアルヴィンはまた教壇へと戻って行ってしまった。

ふう……なんとか助かったかな…？

ほっと一息つきながら、みんなの自己紹介をボツと聞く。

「俺様ゼロス。ゼロス・ワイルダーね。

ハニーたちよろしく」

野郎どもはどうでもいいや」

あの優男はゼロスって名前か…

しゃべらなければある程度カッコいいのに、しゃべると見事に三枚目である。

「あの…エミル・キャスタニエです…

中学はマルタと一緒にパルマコスタ中学に通ってました。よろしく
お願いします」

さっきの金髪アホ毛の人はエミルか…
気は弱そうだけど、このクラスの中では比較的まともな方な気がする。
る。

「やっほー！

私はマルタ。マルタ・ルアルディだよ。

さっき私を紹介してくれたエミルは私の王子様なの♪
みんなよろしくね」

「ま、マルタ…恥ずかしいよ…」

「いいの、いいの。ほらエミルもしっかりする！」

エミルにラブラブオーラたっぷりに立ち上がったマルタは元気そう
な人だ。

ただ、当のエミルは恥ずかしさからなのか少し迷惑そうにしている。
まあ、エミルも嫌がってる訳じゃないから下手に干渉しない方がいい
だろう。

「ミラだ。ミラ・マクスウェル。

今朝は学園の方向を間違え、遅刻してまいみなに迷惑をかけてしま
ってすまないと思っている。こんな私だが、どうか仲良くしてやっ
てくれ」

一筋のブレもなく言うミラは謝罪を述べているのに、かつこよく思
えた。

それにしても、今朝僕と違う方向に向かったのはただの勘違いだ

ったのか…

いや…もしかして方向音痴なんじゃ…

その後も自己紹介は続いていき、最後にアルヴィンの番となる。

「みんな知ってると思うが俺の名はアルヴィン。

『できる男アルヴィン』って覚えてくれ。

なにか困ったことがあったら俺のところに来な。

報酬しだいじゃ話にのってやるからさ」

「教師のくせに報酬なんて要求しないでよ！」

まったくなにを考えているんだろう…

そんなものを要求するなら、いっそのこと傭兵にでもなればいいのに。

「甘ったれるなジュード！」

世の中、いつも誰かが助けしてくれると思うな。

なにかを得るにはなにかを失わなきゃならないんだよ」

「有名なあのセリフをパクってなに決まったみたいな顔してるのさ！」

「ふんっ！」

たしかに教師の言うべきことじゃねえ。

だけど、こいつの言っていることも間違いなく正論だ」

「アッシュ…」

横から割って入ってきたアッシュに反論しようとするが、たしかにアルヴィンは正論を言っているのだから反論できるわけもない。

「わかりました……」

結局は僕が折れるしか道はなく、自己紹介はこれで幕を閉じた。

（放課後）

放課後には部活見学があり、好きな部活を見て回ることができるので、僕は格技場目指して歩いていった。

格技場で部活公開を行っているのは武術部。この学園で一番盛んな部活である。

中学の時は拳法部に入っており、できれば拳法部に入りたかったのだが、ここにはそれがなく、代わりに拳法を含んだ全ての武術を駆使する武術部というものがあるのだ。もちろん、木刀などの武器の使用も承認されている。

ガタンッ

格技場の重い扉を開けると、既に一組が戦闘を行っていた。

使用武器はどちらも木刀。

一人は形式はまりながらも、鋭く堅実な剣さばきの金髪青年。対するは独特の流れるような剣さばきの……

「あっ！」

朝、木の上で寝てた女の子だ！」

思わずあげてしまった大声に二人の動きが止まる。

そして、その女の子がつかつかと僕の方へと歩いてきた。

「あっ、部活の邪魔しちゃってすみ「てめえ、人を女扱いとはいいい度胸じゃねえか」

ドスのきいた声に下げかけた顔をあげると、そこには怒っている人の顔があった。寝ていた時は気づかなかったけど、この人女の子じゃなくて男だ……

「ユーリ、そこまでにしないか」

「フレンは少し黙っとけ。俺は女扱いされるのが気に入らねえんだよ」

ということは、今までも何度か女扱いされたことがあったってことか…

「お前、部活見学者だよな」

「は、はい！」

1—Aのジュード・マティスと言います」

「ならちようどいい。」

ジュード、俺とバトルだ」

第2話 僕と自己紹介と黒髪の美女（後書き）

ユーリの怒りをもって勝負を挑まれてしまったジュード。果たしてどうなる！？

読んでくださる皆様に質問なのですが、1話の最初みたいにナレーター視点か、それ以降のジュード視点のどちらの方が好きですかね？できれば意見をいただけると嬉しいです。

第3話 僕と戦いと諦めない決意（前書き）

エイトさん、サニーレタスさん、神代美樹さん、颯さん、感想ありがとうございます！

第3話 僕と戦いと諦めない決意

ジュードSIDE

「こっちはいつでも準備オツケーだぜ」

「僕の方も準備万端です」

木刀を肩にかけながら言うユーリに僕はプロテクターの具合を確認して応える。

「ジュード、がんばれー！」

「け、ケガとかしないように気をつけてよ…」

「せいぜいボロボロにならない程度に気を付けろよ」

上から順にロイド、エミル、ルークが取り巻きになりながら言う。ユーリからの挑戦を受け、僕が準備している間に三人を含む見学者が次々と集まったのだ。

ざっと見ただけでも二十人以上はいる。

さすがに、これだけの人数が見てるなかで惨敗だけはさけないなあ……

「ジュード、がんばってくれ。君ならできるはずだ」

「ミラ…」

よしっ！

ミラが見てくれるとなれば俄然やる気がわいてきたぞ！

「では、ただいまからユーリ・ローウェル対ジュード・マティスの試合を行います。両者とも前へ」

「はいっ！」

審判をかってでてくれたフレンの指示に従い、僕たちは互いに一歩踏み出す。

「試合開始！」

試合開始の合図と共に木刀を構えるユーリ。

あの位置からなら遠距離攻撃でも仕掛けてくるつもりなのだろう。

「蒼破刃！！」

「魔神拳！！」

僕の拳、ユーリの木刀から放たれる性質の違った衝撃波。

技を放った後の硬直により、とっさに回避に移ることはできない。

このままいけば、まずは両者とも痛み分けといったところだろうか？

「もうひとつ！！」

そう油断してガード体勢に入ったところに繰り出される新たな衝撃波。

「くっ…」

「うわぁ!？」

幸いにも僕の魔神拳は地を這うタイプなのに対して、ユーリの蒼破刃は腰の辺り程の高さで飛んでくるため打ち消されることはなかった。

だが、それは同時に僕は二発受けたのに対してユーリは一発しか受けていないことを意味するのだ……

「おいおい、まさかこの程度でくたばったわけじゃないよな」

「当然ですよ」

口では平然を装うが、今ので遠距離戦は僕の方が不利であることは明確。

なんとかして相手の間合い、できれば背後をとらなければ勝機は薄いだろう。

「もういっちょいくぜ! 蒼破追蓮!！」

さっきと同様、二つの衝撃波を放つユーリ。

魔神拳で応戦できないこともないが、一度のダメージを与えるのに対して二回の攻撃を受けるのでは割にあわなすぎる。

そう考え、僕はサイドステップを踏み衝撃波の軌道から逃れる。

「なんだ反撃してこないのか？」

「これからですよ」

こちらは考えを巡らしながら必死に闘っているというのに、ユーリ

の方は試合前と変わらず涼しい顔をしている。
よほど、自信があるのか単に闘いを楽しんでいるのか……
いや、たぶんどちらものだろう。

「耐えろよジュード！爆碎斬！！」

宙に飛び上がったユーリは身を翻し、その勢いを活かし剣を叩きつけてくる。

本来なら爆碎斬は斧などの重い武器で使う技なのだが、宙で身を翻すことで勢いをつけ、重さによる不足分を補っているのだろう。
だけど、それは大きな隙をうむことにもなる！

「集中！」

相手の技の軌道を的確に見切り、背後に回り込む集中回避。

これは僕が中学の拳法部で身につけた特殊技能であり、今まで幾度となくピンチを乗り越えてきた僕の十八番だ。

そして僕に背を向ける形で床を叩きつけたユーリは技の反動で回避行動をとることができない。この勝負！

「もらっ」「させるかよ！守護方陣！！」

ユーリの背後をとった僕は拳を振り上げ渾身の一撃を繰り出そうとするが、それはユーリが床に木刀を突き立て発生させた円形の衝撃波に防がれてしまう。

それどころか、衝撃波に耐えれなかった僕は無様にもその場に膝をついてしまった。ダメだ……このままじゃやられる………

「立てよジュード」

「えっ…」

後はとどめをさすだけの相手に対してユーリはなにを言っているの
だろう…

「膝ついてるやつをなぶる趣味はねえ。それともギブアップか？」

「……………まだだ…」

ユーリの意図を理解した僕は立ち上がる。

ユーリはたしかに強い。たぶん、僕なんか敵わないほどに……
だけど、それは一度やると決めたことを投げ出していい理由にはな
らない。

僕は戦う。

たとえば、それが勝ち目がないとしても……それが僕の決めた事だか
ら！！

「ふっ、案外根性あるんだな。そういうやつ嫌いじゃないぜ。フレ
ン！」

そう言ってユーリは木刀をフレンに向かって投げる。

「まったく、君は本当に人使いがあらくて困るよ」

「そりゃ、お互い様だろ？」

「たしかに言えてるね」

受け取った方のフレンもユーリの意図を理解したらしく木刀を受け

取ると壁に立て掛けた。

「僕、これでも中学の時は拳法部だったんですよ。本当にいいんですか？」

「上等だ」

そう言うユーリは右手にのみはめたプロテクターをはめなおす。

試合前から疑問であった左利きのユーリがはめた右手のみのプロテクター。

血豆を防ぐために利き手につけるなら話もわかるが、今ので真意がわかった。

ユーリは格闘技もできるんだ。

「「三散華!!」」

ぶつかり合う同じ技。

僕は両手を使うのに対してユーリは右手のみ。
それが僅かな差をうみだしていた。

「くっ…やるじゃねえかジュード」

手数で勝った僕の拳がユーリの脇腹にはいり、体勢を崩す。
だが、右手だけでもその差はごく僅か。

両手を使われれば間違いなく僕に勝ち目はない。

「安心しな。俺は左は剣専用って決めてんだ」

まるで僕心中を見透かしたかのような言葉。
それに僕は若干の焦りを覚えていたのだろう。

「三散華！」

相手の出方を警戒していなかったのだから……

「噛裂襲！！」

「っ！？」

右手のみだというのに、両手の僕を上回るほどの拳の嵐。
脇腹、胸、右肘間接と狙いも確実だ……

ダメだ……僕はもう耐えられそうにないや……

バタンッ

第3話 僕と戦いと諦めない決意（後書き）

今回は少し短かったです、ここまでで。

ちなみにユーリとジュードでは結構レベル差があったりします。

まあ、そこら辺の詳しい話は次回ということで。

では、次回もよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3417ba/>

TALES OF SCHOOL LIFE

2012年1月15日11時51分発行